

〔歴史教育レポート〕

齋藤春彦著 『中学校郷土教材の展開』 に寄せて

七戸 将光

今春、齋藤春彦氏により、標記の御著書（私家版）が刊行された。長年、中学校の第一線で活躍された氏の業績の一端を披露していただいたものである。日頃地域教材をいかに開発し、授業化していけばよいのか悩んでいる現場教師にとって、このような著作は待ち望んでいたところである。

先ず簡単に、主な目次を紹介しておきたい。（年度は実施年度）

- 一 青森県の誕生（昭和四十一年刊行）
- 二 社会科（歴史） 学習指導案 城下町弘前（昭和五十六年度）
- 三 社会科（歴史） 学習指導案 津軽藩の産業の発達（新田開発）（昭和六十二年度）
- 四 社会科（歴史） 学習指導案 津軽の生活文化（こぎん刺し）（昭和六十一年度）
- 五 道徳（人物誌） 二代藩主 信枚（昭和五十七年刊行）
- 六 特別活動（旅行的行事） 「城下町弘前探訪 指導計画」 （平成元年度）
- 七 付 特別活動（旅行的行事） 「鎌倉自主見学 指導計画」 （昭和六十二年度）

一見してわかるように、中心は社会科の学習指導案であるが、郷土弘前に関連する、幅広い内容となっている。ここでは私のような浅学非才の者がコメントするのはおこがましい限りであるが、著作の内容と関連させ、筆者の考えたことを若干述べること、その責の一端としたい。

最近の学校、特に中学校に於いてはマスコミで報道されている通り多忙を極めている。それは私の勤務する小中併置の僻地校に於いても同様である。学校五日制が実施されたが、教員の出張は増加の一途をたどるのみである。また体験的学習の必要性から、学校行事の精選ということが叫ばれながらも、なかなか行事を減らすことができないでいる現状である。この現状を見通してか、平成五年度より完全実施した現行学習指導要領では、三年間を見通した学習指導計画を作成することを求めている。具体的には、地理・歴史・公民の各分野に当てる授業時数の割合を、四・四・三となるように定められている。^①勤務校での昨年度の授業時数は、一・二年次では正味約百二十時間、三年次で約九十時間であった。前述の割合に当てはめると、歴史的分野には二年間で百二十時間となる。一・二年次では地理と歴史を平行して学習することとなっているため、一年次では六十時間の配当ということになる。一年次の六十時間の授業で扱う内容は、人類の出現から寛政の改革後の熊本藩や米沢藩の藩政改革までである。中学校では日本の歴史が中心であるが、関連のある世界の歴史についても学習することはもちろんである。^②ここで教科書会社による教師用指導書を見てみると、前述の内容を五十二時間で扱うように編集していることになっている。このことから、六十時間で充分に終われそうである。しかし、教科書会社で計画している一時間の進度は、

平均で頁数にして二頁ほどであるが、時には四頁にもわたっていることがある。その上での五十二時間なのである。ご承知の通り、教科書は本文だけでなく、図版類が豊富に掲載されているものであるが、それにしてもという感がなくもない。逆に八時間の余裕があるはずであるから問題がない、という指摘もあるだろう。四頁で計画されている部分を分割して時数を多くすると、途端に六十時間を超過してしまうのである。さらに、校内研修や指導主事の訪問など、見せる授業に合わせて単元単位で様々な工夫をしなければならぬ、という実体もあるのである。そのような中で本書が出版されたことの意義は誠に大きいものがある。

さて本書の扱っている内容について、大雑把に前近代史に関する歴史教育・地域教材・人物史と分類することができる。

前近代史を学ぶことは歴史学習の基礎であり、そのためにイメージ化可能な地域教材が必要とされている。また地域教材は、生徒自身が時代のような現実を汲み取り、分析・総合することで教科書からではわからない歴史的事実をつかみ、生徒自身の歴史像を作り上げることに意義があるとされている。⁽³⁾ また地域の歴史・現実を、他地域や日本全体或いは世界と関わらせて再検討し、たえず地域認識を深化・客観化することにも役立つとされている。⁽⁴⁾ そのためには生徒が知的に追求し得るような驚きや感動などを伴い、切実に学習してみようとするものに加工してやらなければならない。⁽⁵⁾ この観点からすると、今日の日常生活の舞台である弘前城下、現在も青森県では主産業である稲作に関連する新田開発は、生徒にとって親しみやすく有意義な教材であるといえる。しかもごん刺しという視点の変わったものも取り上げており、非常に参考にな

る。これらに敢えて異を唱えるものではないが、将来的には国際化・情報化・環境問題や科学技術との関連を重視して学校教育を実践していくことを求められているため、⁽⁶⁾ 自然と関わる新田開発や情報と関連させた国替え騒動なども取り上げてみたいところである。また文化的な面では、やはりねぶたは避けて通れないところと思われる。これらは、後進である我々に残された課題といわねばならない。

人物の面では、二代藩主信枚を取り上げている。藩政史上当該期は、史料も少なく研究が難しいということが言われている。それを受けて、教材化する上でもなかなか難しいところである。また人物を取り上げる時は、選り取り上げる側の価値観に合致したものになりやすいため、とりわけ慎重にならざるを得ない面がある。⁽⁷⁾ しかし本書に於いては、信枚の業績について生徒が知らないであろう史実がコンパクトにまとめられており、しかも親しみやすい文体となっている。この文章を中心教材として、幕政との関連を留意して授業を行うことが充分可能と思われる。一方中学生という時期は、不安を抱えながらも複眼的認識が育つ時期であり、さらに自立を求め、かつ他者との共存・連帯を模索する時期でもある。そうであるならば取り上げる人物を通して、自分自身の問題として探求する気になるテーマを与えてやることも必要である⁽⁸⁾ と考える。⁽⁹⁾

次に、本書の六・七についてである。最近中学校の修学旅行では旅行先である東京で、自主研修と呼ばれる日程が組まれている。ここでは、教員が下見をして定めた地域内で、班毎に生徒に自由に行動をさせるというものである。この自由行動は勿論無制限に行われるのではなく、

予め設定されたチェックポイントを通過することを含めた計画書を事前に提出させ、それに基づいて実施させる類のものである。ここでは実施年度にずれがあるものの、斎藤氏が社会科担当ということもあり、二年度に予行演習として弘前（丁度この年は弘前市制施行百周年である）、三年次の本番として鎌倉を取り上げたものと推察できる。これが進路指導に重点を置いている学校であれば、職場訪問をし、様々な職業についてインタビューする、という内容も想定されるところである。このような内容は、筆者が教員として採用された平成三年度以降各地で話題となったことであり、斎藤氏に於いては先見性が有ったものと感服する次第である。

最後にこれは些末なことであるが、本書について若干気になる点があった。近頃は授業を行う腕を上達させるために、優れた指導案を担当の生徒の実態に合わせて変更を加えながら授業を行い、事後検討会を持ち、さらに授業者の反省を文書にまとめる、ということがよくいわれている。ここでは、実際に授業で提示した資料（教材）と、授業中に発した発問・指示のことは、及び留意事項を明記することが求められている⁽¹⁾。私は授業の腕が上がらないことに忸怩たる思いをしている者である。この点からすると斎藤氏が実際の授業で、どのような資料を用いたか、実際に生徒に対して何と発問したのか、ということが本書だけでは判然としない面がある。参考文献が示されているが、やはり実物を見ないと資料をどのように手直しをして活用したらよいかと惑うところである。留意点についても評価の観点と方法以外に、授業をスムーズに展開させる手だてという面では、これもはつきりしないところがある。また、

授業記録がないため、実際に生徒がどのように反応したのかも窺い知ることができないのである。よって本書では、どの部分を、どのように変更して授業を行えばよいのか、実力不足の私には大変悩ましいところがある、というのが率直な感想である。

以上とりとめもなくコメントを連ねてきたが、このような教材開発をたった一人で行ってきたことに対して、ただただ敬服するよりほかない。このような業績は現場教師にとつて非常に貴重なものであり、今後様々な形で活用させていただきたいと思っているといるところである。

注

- (1) 『中学校指導書社会編』大阪書籍株式会社 平成元年七月 「指導計画の作成と内容の取り扱い」 1-2⁽²⁾
- (2) 本年度中南教育事務所管内採択の教科書は『新編新しい社会』東京書籍株式会社である。
- (3) 岩田健「近代史学習の現状と地域教材」『近代史の学び方』歴史教育と歴史学との対話』歴史教育者協議会 青木書店 一九九六年八月二五日
- (4) 高山次嘉「地域において学ぶ社会科」『社会科教育の回生』共生社会の市民を育てるために』教育出版 一九九六年九月十一日
- (5) 安藤豊「地域の教材化はこの視点で」『社会科授業の改革15の提案』明治図書 一九九六年三月
- (6) 文部時報第一四三七号 第十五期中央教育審議会第一次答申 ぎょうせい 平成八年八月二十日
- (7) 深谷克己「人物学習の視点」歴史学・歴史学習で人物をどのように

扱うか』『前近代史の学び方―歴史教育と歴史学との対話』歴史教育者協議会 青木書店 一九九六年八月二五日

(8) 石井建夫「中学校における前近代史学習―中学歴史学習の全体像を考える」『前近代史の学び方―歴史教育と歴史学との対話』歴史教育者協議会 青木書店 一九九六年八月二五日

(9) このことについては『江戸時代人づくり風土記2青森県』農山漁村文化協会 一九九二年六月二五日 が参考となる。

(10) 向山洋一『授業の腕を上げる法則』明治図書 一九八五年七月 同『授業上達論―黒帯六条件』明治図書 一九八八年十一月

(しちのへ・まさみつ 平賀町立小国中学校教諭)